「高井」二十五号別刷

中野市草間茶臼峯第七号窯址調査

中野市教育委員会

るならば元和六年（一六二〇）となる。

次にこの開発の気運に乗って隣村の中村にあった宣勝寺が、庚新田村竿請（さをうけ）の寛永九年に同村芝間の地を面（おもて）五〇間、裏一〇〇間を寺地として代官の許可を得て、境内以外に替地して与えられ移転し来り、（[illegible]）の勧請もあり、村の姿が次第に備っていったようである。

（信濃史料編纂委員）

中野市草間茶臼峯第七号窯址調査

金井正彦

昭和四六年一月一〇日、土取場斜面の斑雪の間に窯址の一部が発見された。昭和三八年冬、雑木林を開墾後、桃畑となっていた所を永井本店（安源寺七〇八の四永井隆仁社長）は昭和四五年初冬から、カーシャベルによって大規模な採土を実施し、県道レベルまで、平坦にして、後地を宅地化する事業をすすめつつあった。

中野市教育委員会は、ただちに永井本店と協議し、記録保存のため発掘調査を実施することとした。厳寒期と積雪のため調査は雪解けを待って行うことにし、調査完了までは当該地の採土は行わないと約束が成立した。

発見された第七号窯址は中野市大字草間字茶臼峯一〇六一の一・三番地で、去る昭和三八年一二月の第一次調査の一・二号窯址（半地下式無段登窯）の東側約二五メートル、第二次調査（昭和三九年四月）の六号（トンネル式無段登窯）の西側約六〇メートルのところに所在している。なお県道（中野～豊野線）から南へ約二五メートルの地点である。

善光寺平を自由奔放に蛇行して、低い峡谷に入ると限定された流路となって北下するところに高丘～長丘丘陵が千曲川に略々平行して、南北に約九キロメートル走っている。高丘丘陵の北側には三段の河岸段丘が小さく発達し、その段丘面にはいくつかの小形丘陵が起伏している。そして、その斜面を利用して安源(1)・寺草間(2)・立ケ花(3)・牛出の諸部落に古窯址群が点在していることはすでに知られている。それは、窯業立地に極めて良好な条件にめぐまれているためである。

第1表

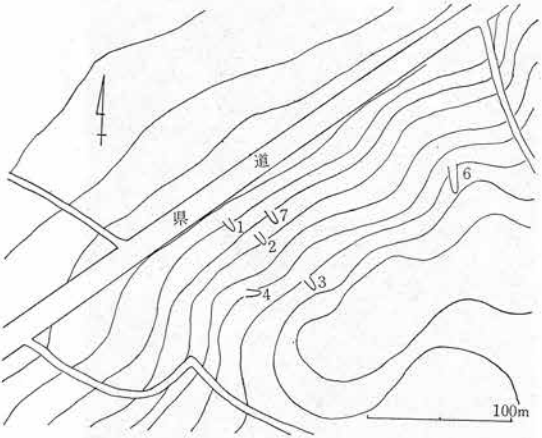
	窯址名	遺構 長さ	遺構 巾	遺構 傾斜	形態	備考
1	茶臼峯1号	m 6.25	m 1.2	27°～36°	半地下式無段登窯	窯印 ×
2	〃 2	8	1.2	18	〃	
3	〃 3	4.6	1.1	15	〃	粘土ブロックあり
4	〃 4	4.4	0.9	8	トンネル式無段登窯	
5	〃 5	6	1.2～2	29	半地下式無段登窯	窯印土井
6	〃 6	8.5	1.2～1.7	22	トンネル式無段登窯	青海波文
7	〃 7	8.2	1～1.2	32	半地下式無段登窯	

ここで、茶臼峯地域における既調査の状況を表にすると第一表の通りである。なお暫見の便を考えて、今回調査した第七号址も挿入した。

表中の第五号址は第一図に紙面の都合で表示できなかったが、この図に表示された窯址群から南方へ約三〇〇メートルの丘陵の中腹に、西へ向って焚口を開いていたものである。特にこの附近の粘土は良質のもので、現在も若林菊之助氏の手によって採取され、精製のうえ移出されて陶芸家の間に好評を博している。

緊急発掘調査については中野市教育委員会が関係方面へ諸般の手続きをすませ、許可を得て、二月二五日から二八日の四日間に亘って中野市教委が主催して実施するはこびとなった。

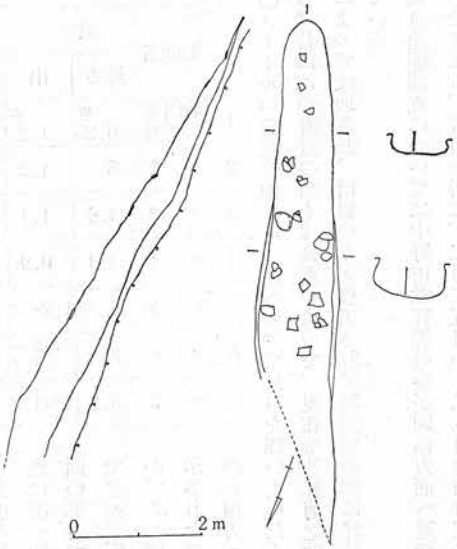
発掘は調査団長金井汲次、調査主任金井正彦、調査員小林曦暉・田川幸生・中丸政範・小野沢捷・檀原長則・武田清美・山下叡男・佐藤慧、調査協力員永井忠・割田市太郎・小林囡武・大原正義・金井正二・藤沢英夫・高橋寛氏等の手によって調査を実施した。なお、このほか高丘小学校六年生二七名、南宮中学校郷土クラブ員二三名の応援を得た。発掘の経過については次に日誌を掲げよう。



第1図　茶臼峯古窯址分布図

二月二五日（木）　晴

奥信濃には珍らしく雪のない二月末であったが、ここ数日は寒波のきびしい朝夕が続いたため、表土は相当深くまで凍っていた。北斜面で一日中寒風にさらされての作業を開始した。土取り



第2図　第7号窯址実測図

によって、窯尻と推定される部分は、県道の左手の丘に大きく口を開き、カーシャベルのため窯址の一部は少し削り取られていた。

発掘調査の内容、方法について打合わせを済ませ、調査員、作業員の手によって作業は始められた。表面採集によって大甕破片・木炭片・窯滓等を得た。

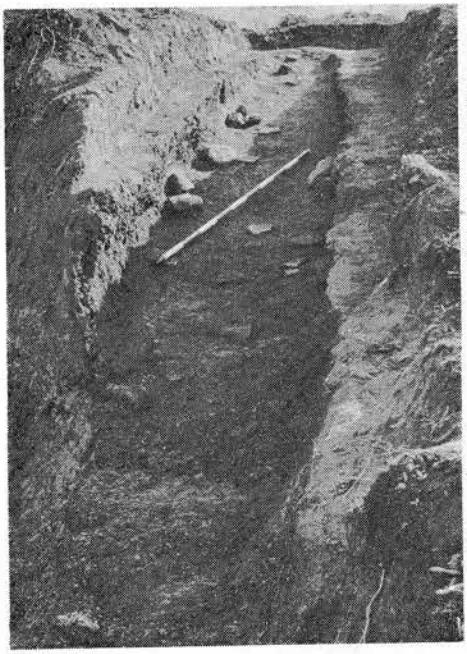
凍土をツルハシで除去し、焚口と灰原の接点の究明にかかったが凍土で堅いうえ、足場も悪いため長さ三メートル、幅一メートルの検出にとどまった。夕刻、作業終了直前に煙道の一部の確認ができた。

参観者　内藤万次郎氏ほか

二月二六日（金）　晴

焚口の確認と煙道の一部検出によって、窯址の構造が推定できるようになり、上方と下方の二班にわかれて作業を始めた。

焼成部と思われる地点には開墾時にブルトーザーによって多量の土が積み上げられ、地山まで堀りくぼめる作業は容易でなかった。窯壁は一二センチメートル～一五センチメートルの厚みによく焼け、内側は赤褐色、外側は暗青色を呈しセメントで固めた状態であった。したがって窯壁を掘り進めれば窯の構造が推定できるようになった。


第3図　7号窯址

天井は全面にわたって落ちていた。本日の作業では床面の一部も検出され、燃焼部に坏の破片があった。午後高丘小学校教諭佐藤慧先生の引率児童二七名の応援を得て作業ははかどった。

参観者　小林小ェ門氏ほか

二月二七日（土）　晴

ビニールやムシロで覆っても寒さのため凍って、午前中の発掘作業は難渋した。天井部の落下窯滓には三～五センチメートルの長さのスサが混入してあったので半地下式の構造をもつものである。床面もよく焼け、舟底内にあった大甕破片や自然石を焼成台にしていた。窯内にあった大甕破片は一四点、石は一〇個であった。午後飯山北高等学校考古クラブ員大原正義君他六名が手なれた発掘調査で応援してくれた。

また、昨日同様佐藤先生と児童たちの応援を得た。夕刻日没前に窯址の全姿が判明し、窯長八・二メートル巾一～一・二メートル平均傾斜は三二度であることが判明した。

参観者　金井正巳氏ほか

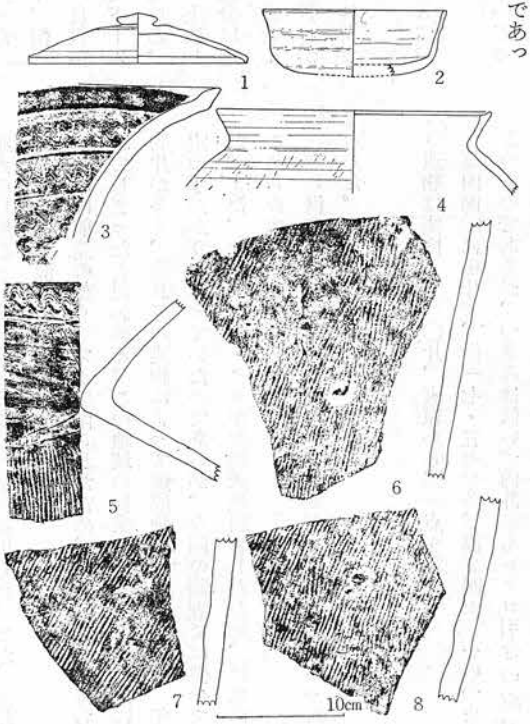
二月二八日（日）　晴

昨夕は清掃をすませビニールとムシロで覆ったが霜柱が立って朝からの測量に支障が多く、また、朝から北風が強く、傾斜角の強い窯内での測量作業は難儀した。早朝から南宮中学校教諭山下俶男先生と郷土クラブ員二三名の応援があって表採につとめた。特に六号窯址の灰原から開墾の折にブルトーザーが運びだした粘土中には青海波文の甕破片が多量にあった。午後は遺物を高丘小学校へ運び土器洗いを行った。

参観者　青木太郎氏ほか

中野市立高丘小学校の東方茶臼峯地籍は二〇～三〇度の傾斜をもつ丘陵である。この丘陵の中腹の北傾斜地を利用し、地山の粘土層を刳り貫いて登窯が構築してあった。

開墾の折に表土のほとんどはブルトーザーによって動き、原初の

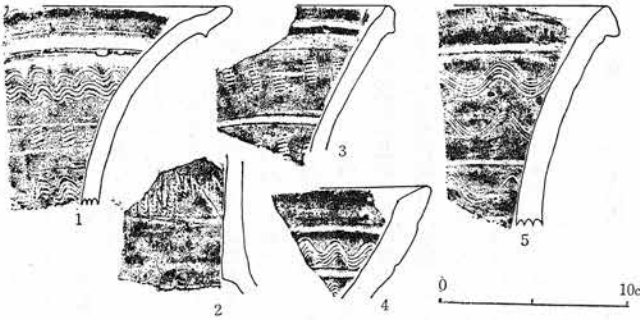


第4図　第7号窯址遺物

地表状況は不明であるが、幸いに、窯にまでは爪が及ばなかった。

窯の築造は、まず地面から掘り凹め、長さ八・三メートル、幅一～一、二メートルの規模とし床を舟底形に作った。ついで、良質粘土に三～五センチの藁を切ってスサとし、よく煉った壁土でドーム形の天井を架築したもので半地下式無段登窯の形式をとっている。

窯の焚口の下には灰原が末広状に存在したが、永井本店の土取りの際に、その大部分は削られてしまった。残存した灰原を測ると、焚口から下へ一五メートル伸びていた。



第5図 表採資料

登窯の主軸はNS二二度であった。

窯壁は約一二～一五センチの厚さに火焔によってよく焼けていた。内側は赤褐色に、外側は暗青色を呈し、床も暗青色に固く焼けていた。天井は全部落下し、窯滓とともに窯内に残存していた。

窯内からは焼成台に使用したと推定される幼児頭大の自然石一〇個、大甕破片一四個を検出した。また、盃片二点坏片三点、小形薄手甕片一点を得ている。

灰原は前述の如く、ブルに削られたため、採土とともに持ち去られてしまったと思われる。この地域の従来の調査では、灰原には遺物片が多く、それ等の遺物によって焼成物の種類が判明し、年代推定の手がかりとなっていたのであるが、今回の調査では僅少であった。また、マツ・ナラ・クヌギを焼成燃料としたため、灰原には、これらの木炭片が多くあった。

窯の構造が良好であったためか、繰業期間は比較的長かったと推定した。

遺物は窯内より二〇片、灰原から三一点を得た。

第四図(1)は盃片で、径一七・五センチ、高さ四センチのつまみ付きのものであるが、つまみは低い。内外ともロクロ引きの痕が残り、焼成は可成り堅緻である。(2)は坏片。ロクロ調製の痕がよく残っており、底はヘラ起しで径一四・五センチ、器高五・五センチ、暗青灰色を呈し、胎土焼成とも良好である。

(3)は大甕片。ラッパ状に外反する頸部には波状の櫛目文が三条横走し、その間をヘラ状工具による沈線で区切っている。

(4)は器肉〇・六センチ前後の比較的薄手の壺片で図上復元によると口径二二センチを測る。肩部には浅い沈線を三条めぐらせ、また、淡いタタミ目文の痕が観取できる。頸部外側に刷毛目調製のあとが見られる。

(5)大甕の頸部・肩部の破片。頸部には櫛目の波状文を、肩部には垂直のタタミ目文をつけている。(6)～(8)は大甕片で、厚さは一・五センチ前後。斜めにタタミ目文を付し、内側はタンポ状工具によって、胎土をたたきしめた凹凸の痕がある。焼成台に使用されたためか、二次火焔痕が見られ、所々に窯滓の付着したものもある。また、文様は磨滅したあとがあった。

第五図は甕の破片で、ラッパ状に大きく外反し、櫛目の波状文を付している。胎土焼成ともに良く、暗青灰色を呈し、器肉は一～一・五センチ前後のものである。(3)は櫛状工具によって刺突文を施し、(5)はうねりの大きい波状文を、(1)(2)(4)は小刻みの波状文である。

これら表面採集の資料は、三月二八日、南宮中学校郷土クラブ員によって収集された。地点は六号窯址の真下で、県道に接する所であった。かつて開墾の折にブルトーザーが、灰原を下方へくずし押し出したためのものであろう。遺物のすべては灰層の裡に在って、木炭片も多かった。

遺物はリンゴ箱三杯分に達し、大部分は、大甕の細片で、表面にはタタミ目文を、内側はいずれも青海波文を付している。その他数点の坏細片・蓋片もあった。

本窯址は、高丘丘陵に所在する窯址群中、最も密集地帯（第一表）にある。それは架窯条件に恵まれた傾斜面を持ち、焚口は北に開き、季節風によって焼成能率が高かったためであろう。窯構造のすぐれた本址は窯壁・窯床の焼けは大久保三号址に次ぎ、繰業の頻度の高さを物語っている。

窯址の傾斜は三二度を算え、西隣りの一号址の二七～三二度に次いで急で、手頃の自然石や甕片を焼成台に使った半地下式無段登窯である。しかし、天井のすべては落下して、その形態は全く不明であるが、すでに述べた如くドーム形であったと思われる。煙道の形態も不明であった。

従来の窯址群の調査によれば、遺物の大多数は灰原に存在したが、今回のものは灰原の遺物がほとんど採土の際に持ち去られ、検出分のものでは判定し難い。しかしあえて云うならば、その残存遺物の形態から、大久保一・三・四号に極めて類似している点から、九世紀初頭のものと推定したい。

以上末熟なるままに叙述したが、先学諸賢のご教示とご教導をいただきたいと存ずる次第である。

（下水内郡栄村堺中学校教諭）

〔注〕

(1)中野市教育委員会「安源寺」

(2)大川清・金井汲次「長野県中野市草間窯業遺跡」信濃一六巻一一号

(3)金井汲次「中野市立ケ花表山古窯址調査」高井第二四号